

60 『診病奇佻』中の「無名氏」は
島浦和田一である

大浦 宏勝

北里研究所東洋医学総合研究所

【前言】多紀元堅編『診病奇佻』は、日本腹診の諸流派を網羅した重要な書である。明治十一年刊の松井操漢訳本「採摭諸家」には北村寿安以下三十二家の氏名が列挙され、その説が収録されているが、書中「無名氏」の名で引用された文章が数多く存在する。「無名氏」とは誰か、何故「無名氏」とされたかの謎を解明する。

【方法】北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部は、平成十五年秋に杉山検校遺徳顕彰会秘蔵の『杉山真伝流』和装本七冊、卷子本二軸の修復および鑑定を依頼された。その内の島浦和田一著「表之巻第二」は、杉山流の腹診を総括した内容であるが、この条文と「無名氏」の説とが似ている事に着目し、比較検討した。

【結果】『診病奇佻』中、「無名氏」の文章は十二カ所

存在する。また杉山真伝流宗家である和田春長の説も二カ所存在する。比較検討の結果、計十四カ所の内十三カ所は、「表之巻第二」からの引用文であることが判明した。一例を挙げる。

○「診腹之法、正心端整、容貌舒緩、最忌粗厲、〔時寒冷請炉火或懷手先試自己之膚〕而後令患人仰臥、安手伸足、解帶暫候其呼吸調和、而後先摩擗胸上、以至腹臍、診其周圍、及高下平直、至胸上察腠理之潤枯、皮膚之堅脆……〔無名氏〕（下手之法）

●「診腹之法、雖有出靈枢素問難經……於其法也、先正心、務容貌、默而靜思、使心會意、屏氣、確然沈密厚重、緩臂膊、舒手指、安脚膝、聊禁有麤厲矣。時氣寒涼則布帷垂幕蔽屏風、勿露風、近火炉候焉。若其手掌冷則以手炉暖之、先試自己而後可对患者。正診時、令患者厭臥、安手伸脚緩帶候呼吸。暫而解衣襟、用右手摩循胸以下至臍腹、診皮膚之潤渴、及骨之高下平直、肉之堅脆、弁知虛実。」（表二）

——以上、若干の表現の差異はあるものの、無名氏・春長の説ともに「表之巻第二」からの引用である。

【何故「無名氏」なのか】

その鍵は、「診病奇骸」中の一文と、幕末の和田家当主春徹の文中にある。大塚敬節「修琴堂文庫」所蔵《嘉永五年孤松清史筆写本》には「採摭諸家」中「無名氏」の下に「其書名ヲ併佚ス和田春長其説ヲ載タレトモ名氏ヲ挙ス惜ヘシ」と付記されている。また「和田春長」の下には「診腹之説□、春長名ハ正定針科医官、吉益東洞ニ淵源ス東洞診、録龍安寺殿真徳常善入江山瀬杉山片岡佐川等遺言ト云」と付記されている。「吉益東洞云々」なる語は誤入かと思われるが、「録龍安寺殿云々」の語は「表之巻第二」巻末の語である。

また幕末の王政復古に際し、『針治由来』なる一文を奏上せんとした和田春徹（正長）の文には「杉山檢校」（初代総檢校）の名はあるものの、医官和田家の開祖であり第三代総檢校であった島浦和田一の名は無い。また杉山真伝流の始祖を島浦の嫡男「和田春徹（直秀）」とし、三島・島浦の名を伏せ、杉山の「高足弟子三人アリ逐次ニ幕府ニ仕ヘテ侍医トナル臣ガ祖和田春徹其一タリ」とのみ記した。

島浦が総檢校を引退したのが元文元年（一七三六）、その後四代目・五代目惣録には杉山門下から島崎登栄一・杉枝真一が継ぐ。和田春徹は父に先立ち没し（元文三年十二月）、島浦は遺跡を春長（正直）に継がせ、寛保三年（一七四三）九月に没した。流儀書『杉山真伝流』の内容は、島崎・杉枝ら当道座幹部にも秘されたようで、江戸期を通じて他に伝授された形跡が無い。

杉山和一が創始した「鍼治学問所」は、いつの頃から和田家屋敷内の「杉山流鍼治惣根本稽古場」と大弁財天社地内の「杉山流鍼治稽古場」とに分離してしまふ。『杉山真伝流』を和田家の家伝書として秘し、当道座の杉山流鍼術と家伝の流儀を区別せんとする意図が働いていたことは否めない。